

# 山と博物館

第41巻 第1号 1996年1月25日

大町山岳博物館



厳冬の夜明け（大町市三日町より） 撮影 峯村 隆

## 子年雑感

飯島 喜久代

一九九六年、子年である。病原菌の媒体となったり、穀物を喰い荒らしたりと、考えてみれば、人間の害になる様な事はかりするネズミ達なのだが、なぜか、昔話や物語の中に、親しみ深い存在として登場する事が多いのは、あまりに身近な、しかもマイナーな存在である事と、黒目がちな瞳の顔つきと、かいがいしく動き回る様が愛らしいからだろうか（あのシツポはちよつと不気味であるが）。

不幸な境遇にあった小公女セーラをなぐさめていたのは屋根裏のネズミだった。大國主命を燃えさかる火の海から救ったのもネズミだった。おむすびを追いかけてネズミの国へ行ったお爺さんは、さんざん、ご馳走をしてもらった上、おみやげに宝物までもらって帰って来た。何ともありがたいネズミ達ではないか。

私は八十を過ぎてなお、元気に山歩きを続けておられる方を存じ上げている。名前はその人の一生を左右するともいわれるが、その方が名前に持つておられる「子」の字が幸しているであろうか。はつらつと、何事にも前向きに接するその方を見ていると、同じ女性として誠にうらやましく、齢を重ねていく事が楽しみに思えてくるのである。ホンドハツカネズミ、アカネズミ。これらは山博の展示室で覚えた名前であるが、一口にネズミといっても、日本には、大きさ、食べ物、棲む所の違う何種類ものネズミ達が息しているのだから、シロウト目には違いが区別できないようなものもあるそうだ。中には、ジネズミのように、ネズミと名がついても、実はネズミでないネズミもいるらしいのである。

野山に棲み、肉食の獣禽類のエサのひとつとなつて、彼らの生活を支えているのもまたネズミである。そのネズミ達のエサの供給源は田や畑ばかりでなく豊かな森林や草原であることを忘れてはならないだろう。そして、そこでは、ネズミは確固たる一匹の野生動物なのである。

（山岳博物館協議会委員）

# 近世高瀬川上流域における 河川氾濫と川除普請(1)

荒井今朝一

はじめに

高瀬川は、北アルプス槍ヶ岳に源を発し、途中麓川、鹿島川、乳川などを合流しながら安曇平を流下して明科町で犀川と合流する流路延長約七五キロメートルに及ぶ信濃川支流の一つで、源流地域は盛んな侵食作用により深いV字谷を形成しており、荒川として著名であった。このため、降雨が続くと濁流となつて押し出し、下流域一帯では幾多の氾濫に悩まされてきた。また、鹿島川は鹿島槍ヶ岳を源とする高瀬川最大の支流で、流路延長一九

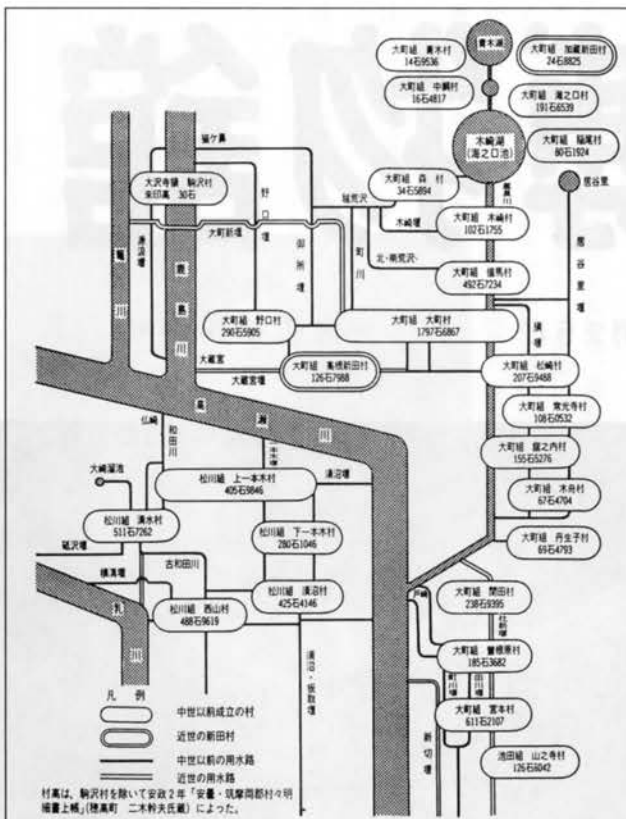


図1 大町市内の近世水路系統略図 村高は駒沢村を除いて安政2年「安曇・筑摩両郡村々明細書上帳」(穂高町 二木幹夫氏蔵)によつた

キロメートル、平・大町地区の主要な用水堰である越荒沢、野口堰などを分岐し、野口付近で高瀬川と合流している。ここでは、両川を中心に農具川、乳川なども含めて近世における高瀬川上流域一帯の河川氾濫と川除普請(水防工事)について若干の概括的な考察を試みたい。

### 一 取水口と「難所」

図1は、近世高瀬川上流域の河川と水路系統の概略を示したものであるが、これによれば高瀬川の右岸と左岸では大きな違いがあることがわかる。すなわち、大町・平・社の左岸地帯は、農具川を縦の軸として鹿島川、麓川水系の用水路が網目状の形態をなしてこれを補強しているのに対し、常盤・松川の右岸地帯は、高瀬川から直接取水した和田川、須沼取堰、一本木堰の三用水路を縦の幹線とし、乳川水系の用水がこれを補強しているのである。このことは、現大町市域を中心とした安曇郡北部地域の計画的開発が、木崎湖を天然の温水溜池として活用する農具川水系や段丘上から行われ、その後治水の発達に伴って次第に大河川からの直接取水による平坦地の開発へ移行したことに起因すると考えられるが、そのことの詳細は、別の機会に検討を試みたい。

さて、こうした灌漑水路の取水口は、どのようなところに設けられたのであろうか。実は、農具川水系の一部などを除いて、水路の多くは河川から自然流出していたものを周辺整備しながら安定化させたもので、言い替えばこちらの取水口付近が最も氾濫し易い危険箇所であり、そのために一方で聖牛などを用いて流れを堰止め、水門を設け、水を導きながら、その直下には何重にも石積、芝土手などを設けて逆に水勢を防ぐというある種の「矛盾した構造」を成していたのである。実際、水害や川除に関する多くの近世史料を見ると、「難所」と呼ばれた最も被害を受け易い箇所が多くは、水路の取水口と一致しているものであり、ここに水利調整が困難を極めた原因があったのである。こうした「難所」の具体例としては、鹿島川では猫鼻(猫ヶ鼻)や大蔵宮などが、高瀬川左岸では高根先や光明寺沖、戸崎(社間田)などが、また右岸では仏崎、戸崎(常盤須沼)、赤石(松川)など

が知られている。

次に、水害の実態について述べてみたい。管見によれば、高瀬川をはじめどの河川もいづれ劣らぬ急流でありながら水門の破損や水路の流失、田畑の冠水の記録は多いが、家屋流失などの史料は少なく、人災にまで及んだという記載は皆無に近い。その主な原因は、長年にわたる経験から比較的安全地帯に集落が発達しており、治水が完備して安全性が確実でない限り沿岸の危険地帯には居住しなかつたことによるものと考えられる。

その中で、家屋や人災にまで水害が及んだ数少ない記録としては、近世前期の高瀬川が左岸に異動したことによる丹生子村の集落退転、寛政元(一七八九)年の鹿島川氾濫による源汲集落の流失、文化一三(一八一六)年の乳川氾濫による西山村の流失などが著名であるが、享保三(一七一八)年の大沢寺山水論に関する史料の中には「先年も猫鼻で鹿島川が氾濫し、町川筋を流下して大町の塩蔵や榎蔵も水浸しに成つた」との記載が見られ、時として予想外の事態も起きていたことが推測される。

三 貢租史料から見た水害の実態

次に、水害による被害状況を各村ごとに統計的に見て行くことにする。近世松本藩(戸田氏)では、年貢は、検地による登録高(村高)から種々の控除を行い、さらに口税や各種の雑税を付加して収納高を決定し、各村の庄屋に命じて収納していたことが知られているが、こうした年貢控除の中に「永引」と「当流引」の記載が見られる。永引とは、一旦、検地で登録された田畑のうち、災害などによって半永久的に耕作不能になった土地

表1 大町組村々の永川欠、永引の推移

区分	元禄9年(1696)			文化7年(1810)			文政4年(1821)			天保5年(1834)			弘化3年(1846)			
	村名	村高	永川欠	率%	村高	永引	率%	村高	永引	率%	村高	永引	率%	村高	永引	率%
八郷	宮本村	434.0951	7.2061	1.66	517.4927	26.6941	5.16	518.8447	24.5814	4.74	559.7177	23.9314	4.28	608.8187	26.0734	4.28
	曾根原村	141.6435	6.6625	4.70	175.1982	4.6022	2.63	175.1982	4.1455	2.37	184.8762	4.1455	2.24	184.8762	4.1455	2.24
	間田村	215.3322	10.9500	5.08	232.1535	21.8295	9.40	233.9265	21.9745	9.39	237.0315	21.9745	9.27	237.0315	22.2760	9.40
	丹生子村	55.3476	5.8156	10.51	69.4793	21.0108	30.24	69.4793	21.9488	31.59	69.4793	21.9488	31.59	69.4793	22.3518	32.17
	木船村	60.9490	0.6060	0.99	67.4074	1.8466	2.74	67.4074	2.9896	3.40	67.4074	2.2896	3.40	67.4074	2.6166	3.88
	館之内村	143.9695	0.5960	0.41	151.5816	3.7177	2.45	151.5816	3.7177	2.45	151.5816	3.7177	2.45	155.5276	4.8120	3.09
	常光寺村	100.2539	0	0	107.3722	0.8760	0.82	107.3722	0.8760	0.82	107.3722	0.8760	0.82	108.0532	0.8360	0.77
	松崎村	196.7339	0.4140	0.21	207.9488	3.7246	1.79	207.9488	3.7246	1.79	207.9488	3.7246	1.79	207.9488	3.7246	1.79
	小計	1,348.3247	32.2502	2.39	1,528.6337	84.3015	5.51	1,531.7587	83.9581	5.48	1,585.4147	82.6081	5.21	1,639.1427	86.8359	5.30
	平野	大町村	1,403.3076	4.5390	0.32	1,628.8147	51.9571	3.19	1,688.5697	52.5366	3.11	1,786.2157	55.6598	3.12	1,795.8187	133.7698
高根新田		76.2144	0.0560	0.07	126.1858	2.3557	1.87	126.7988	2.3557	1.86	126.7988	2.7997	2.21	126.7988	3.2767	2.58
野口村		248.4414	0.6999	0.28	289.2795	14.7862	5.11	289.7255	15.0562	5.20	289.7255	15.7155	5.42	290.5905	18.1955	6.26
借馬村		458.2534	0	0	480.7954	2.0930	0.44	481.0884	3.1930	0.66	481.3764	3.7870	0.79	487.1134	3.7870	0.78
木崎村		97.7105	0	0	101.5425	0	0	101.5425	0	0	101.5425	0	0	102.1755	0	0
森村		27.4640	0	0	34.5894	0	0	34.5894	0	0	34.5894	0	0	34.5894	0	0
稲尾村		75.0300	0	0	80.1924	0	0	80.1924	0	0	80.1924	0	0	80.1924	0	0
海之口村		169.5550	0	0	187.3649	0	0	187.3649	0	0	189.0029	0	0	190.8259	0	0
中綱村		12.9710	0	0	15.0647	0	0	15.0647	0	0	15.0647	0	0	15.3997	0	0
青木村		11.6200	0	0	14.6876	0	0	14.6876	0	0	14.6876	0	0	14.6876	0	0
加蔵新田	21.3715	0	0	23.2340	0	0	24.6205	0	0	24.8825	0	0	24.8825	0	0	
小計	2,601.9388	5.2949	0.20	2,981.7509	71.1920	2.39	3,044.2444	73.1445	2.40	3,144.0784	77.9620	2.48	3,163.0744	159.0703	5.03	
山中小計							1,706.0316	53.4692	3.13	1,706.5286	53.4092	3.13	1,707.3626	53.8712	3.16	
四ヶ条小計							1,997.9196	161.6533	8.90	2,005.3665	157.3278	7.85	2,011.0375	154.4981	7.68	
小谷小計							1,244.0046	132.4469	10.65	1,247.8996	130.2284	10.44	1,250.5056	130.4284	10.43	
大町組合計	8,393.2156	104.2477	1.24	9,436.6033	509.2492	5.40	9,524.4056	504.6720	5.30	9,689.2878	501.7455	5.18	9,771.1228	584.7226	5.98	
依拠史料	大町組諸色指出張 (大町市 栗林士郎氏文書)			各村免状写 (大町市 栗林士郎氏文書)			大町組草高役高仕出張 (大阪市 栗林忠夫氏文書)			大町組草高役高仕出張 (大阪市 栗林忠夫氏文書)			大町組草高役高仕出張 (大阪市 栗林忠夫氏文書)			

表2 享保11年(1726)現在、松川組村々の村高に対する永引の割合

現在の市町村	村名	村高	永引高	永引高/村高(%)
大町市(常盤)	清水村	427.1047	15.6707	3.67
	一本木村	267.6475	6.7733	2.53
	下本木村	252.5936	9.0411	3.58
	須沼村	353.0935	18.6026	5.27
	西山村	476.9057	20.1150	4.22
現大町市小計	1,777.3450	70.2027	3.95	
松川村	川取村	1317.2463	27.3250	2.07
	板取村	468.5732	31.4997	6.72
	神戸新田村	81.1460	52.1878	64.31
	細野村	192.2638	93.6208	48.69
	鼠穴村	150.8060	6.5648	4.35
現松川村域小計	2,210.0353	211.1981	9.56	
穂高町	立古村	202.8852	9.3580	4.61
	足麻村	396.4732	7.4280	1.87
	新屋村	522.9586	2.4177	0.46
	下田村	522.2728	17.2357	3.30
	富田新塚村	109.9375	0.1493	0.14
合計	6,231.0275	332.5752	5.34	
原史料ノ高	6,370.2175	332.5752	5.22	

(注) 「定御用掛」18石0750は永引高に含めた。永引の登録年は各村により異なるが、享保9年までに登録されている計によった。  
 (享保11年「信州安曇郡松本領松川組高並諸色指出張」大町市清水利和氏文書による)

で、享保一〇(一七二五)年以前の水野氏統治下ではこれを「永川欠」と呼んでいたように、そのほとんどは河川氾濫によるものであった。一方、当流引とは、その年一年限りの水害等による年貢除外地で、多くは再び耕地化されるのであるが、文化一三(一八一六)年の西山村では、村高四一〇石余に対して、当流引が一四四石余のほっており、この年の水害の大きさが窺われる。

表1は、こうした永引、永川欠の推移を大町組に属していた村々についてまとめたものであり、表2は、享保一〇(一七二五)年現在の松川組村々の村高に対する永引の割合を示したものである。まず、表1により大町組村々について考察してみよう。大町組では、この表に示した一五〇年間に一三〇〇石以上の村高の増加があったにもかかわらず四八〇石以上永引(永川欠)の増加が見られ、水害による被害がいかに甚大であったかが知られる。

また、高瀬川や鹿島川沿岸に耕地を持つ八郷(現社地区)や大町村、高根新田、野口村で永引が多いのに対して仁科三湖周辺や農具川沿岸ではほとんど永引がなく、農具川が安定した効果的な水利であったことが知られる。特に、丹生子村では、実に村高の三分の一が永引になっており、集落退転の実態が数字上からも確認されるのである。また、小谷地方や四ヶ条(現白馬村地域)でも永引が多く、これらは姫川及びその支流の松川、平川、楠川などの氾濫と土砂崩落によるものであろう。一方、表2によれば松川組では、現松川村地域の神戸新田と細野村の永引が注目される。このうち、神戸新田は村高の三分の二が永引になっており、これは主として菅間川と乳川の河川氾濫によるものである。また、細野村でも約半分が永引になっているが、これは主として高瀬川の氾濫によるものである。

(信濃史学会会員)

# 山村生活の知恵 (1)

## トチノミを食べる

渋谷 祥充

一、はじめに

山村の人々の暮らしの中で行われ、近代の合理的な生活様式の導入によって消えて行った習俗は数え切れない。しかし、最近の地域おこしの流れの中で見直され、新たに息吹を吹き込まれたものもある。新潟県との県境の山懐に抱かれた小谷村大網地区で作られてきた伝統的なトチノミの加工食品は現在特産物として、新たな価値を与えられるに至っている。

二、大網と栃

千国街道の宿場として栄えた大網は、昔からトチノミを凶作時の非常食として大切にしてきた。享保年間に大網村から大町大庄屋宛てに出された古文書(大網 武田信一氏文書)はそれを如実に表している。大網山に享保五年から木地屋が入って轆轤を立て、木地類を作るため栃の木を切り尽くしているというのである。「非常食であるトチノミを得られなくなってしまうので、木地屋を他の地方に移住させて欲しい。」という嘆願書は自給生活にトチノミがいかに大きな意味をも



写真1 トチムキで皮をむく

っていたかを物語っている。

以前は集落のはずれに「トチボラ」と呼ばれる栃の木があり、ここは大網地区の共有とされ、ここはトメヤマにされていたという。トチノミ拾いの「山の口」(解禁日)があったという言い伝えは残っていないが、拾う量が決められていた時代もあったに相違ない。

三、トチノミ食の習俗

トチノミはコサゲ(ワラなどで編み込んだ袋状の背負い道具)などもって拾いに行く。拾ってきたトチノミが食べられるようになるまでには多くの加工工程を経るが、この工程は全国各地で多少の違いはあるが、ほぼ共通している。ここで、大網での加工法を見ても

ることしよう。

まず、拾ってきたトチノミをバケツなどにいれ、一晩くらい水に浸し、虫殺しをする。そして、むしろに並べてシワがよるくらい天日干しをする。ここまでは主に貯蔵のための工程だが、次の皮むきがうまくできるかどうかをも左右する。皮むきはぬるま湯にトチノミを二日間ほど浸し、皮がむけやすくなるようにしておき、鍋にいれて煮えたらぬるま湯に火加減しながら、取り出して一つ一つトチムキ(写真1)という道具を使ってむく。トチノミの外皮を細長い二枚の板の間に挟み込みながらむくが、その微妙な力加減は長年の経験が必要である。湯を煮え立たせると「二エトチ」になって食べられなくなるという。



写真2 トチカキ後のトチノミ

次に水さらし、トチカキ、灰のアク抜きはトチノミのアクを抜く作業である。まず、網などに入れて一週間くらい冷たい流れ水にさらした後、桶にトチノミを入れて煮え湯を加え、熱くなったらナラやケヤキなどの堅い木の灰をトチノミと同量加え、棒でゆつくり掻き回す。これがトチカキである。そして一週間ほどおき、これがうまくゆくとクソツカワ(表皮)が難無くむけ、色が黄色くなり、舐めるとピリツとした舌触りがするようになる。(写真2) 灰のアクを抜くため、水に一晩つけて、ようやく餅米などと一緒に蒸して餅についたり、トチガユなどにして食べることができるようになるのである。

四、現代におけるトチノミ食の意義

この様にトチノミ加工は複雑でしかも熟練を要する作業であり、材料も得難い時代となっている。このため、以前は非常食として用いられたトチモチが、正月などのハレの日の食として用いられることが多くなった。貴重なものであることに変わりはないが、飢えを凌ぐための非常食から、祝い事の食への変化は見逃すことができない。

また、この様な加工技術が狩猟採集時代からの試行錯誤の集大成であることを考えれば、人が自然を取り込み、自分のものにしてきた歴史の延長線上に現在のトチノミ食がおかれていることの意義は大きい。

(長野県民俗の会会員)

山と博物館 第41巻 第1号  
発行所 千歳長野県大町市 TEL 0261-2111  
印刷所 長野県大町市 大町山岳博物館  
大糸タイムス印刷部  
定価 年額 一、五〇〇円(送料共(切手不可))  
郵便振替口座番号 〇五四〇七 一三九三